

## 天然遡上河川への旅立ち 大きな障害はえん堤群

### 友釣りの舞台裏 福井県・日野川漁協

天然遡上(そじょう)アユを増やすために親魚保護を一。福井県の日野川漁協が管内下流部に5<sup>キロ</sup>に及ぶ網とコ[コガシ]釣り禁止区域を設けることが明らかになった。さらに友釣り師誘致のために網解禁を2週間遅らせて、10月1日に。友釣り解禁が待ち遠しいが、今季も6月下旬のスロー発進。自前の中間育成池で育てた海産系人工産で終盤をにらんだ布陣をとる。越前市に放流を待つ稚魚と関係者を訪ねた。(柳沢研二)

### 5キロの産卵保護エリア新設

#### 放流3分の1に

九頭竜川水系の日野川はえん堤が非常に多いのが特徴。下流部(越前市)の堤防に立った篠田裕彦副組合長(70)は、「天然遡上魚は場所にもよりますが、全体のせいぜい2割程度と思われます」。さらに「漁協の運営は厳しく、放流量



も減少傾向です。遅いかもしれませんが、遡上を増やすための思い切った取り組みを進めなければいけません」と力を込めた。放流量はピーク時の1989(平成元)年には13<sup>トン</sup>余あったのが、去年は3<sup>トン</sup>610<sup>キロ</sup>にとどまっている。ド2008年、アユ研究者の高橋勇夫さんに漁場を診断してもらったところ、下流部に産卵に適した場所があることが分かった。「天然アユの回復は困難ではないという結論でした」と篠田さん。「まず漁協ができることとして、網、コガシ禁止区域を設けました」という。エリアは有定橋から石田橋下流500<sup>メートル</sup>までの約5<sup>キロ</sup>に及ぶ長大なエリアだ。ちなみに、ここでの友釣りは可能だ。

#### 網遅らせ10月に

さらに網の解禁をこれまで9月第2週の土曜日だったのを10月1日に遅らせた。友釣りが終盤まで楽しめるという集客策とともに、早期産卵群を網から守れるというメリットもある。ただ、日野川で遡上を増やすために大きな障害となっているのがえん堤。特に7つのえん堤について、魚道構造の悪さが指摘されていた。「ここ5年で8カ所の魚道を改修してもらいました。構造の悪い7つについても順次、改修が進んでいます」と篠田さん。



## 直営の中間育成施設

放流用稚魚の中間育成施設を持っている日野川漁協。取材日(3月31日)に案内していただいたが、越前市の漁協事磁所横にあり、近くを日野川が流れる。屋内に30トンの水槽が7つ、屋外にも2つの水槽がある。水は地下水を利用している。

## 今年も海産系のみ

施設は内水面振興施設補助事業で国や県、地元自治体からの補助事業で2007年に完成し、翌年から中間育成を手掛けている。総事業費は約8000万円だったが、漁協の負担は1割ほどだったという。種苗は九頭竜川などで親魚を採捕して、採卵してふ化させた海産系人工産。昨年親魚を日野川でも採捕しており、故郷の川での活躍も期待されている。今年も小浜市の栽培漁業センターから2月下旬に稚魚が運び込まれた。飼育は漁協の理事ら6人が交代で手掛けている。餌は自動なのだが、「稚魚に囊常はないか」「水温チェックとともに水は止ま

っていないか」などの見回りをするという。この日は伊藤建一さん(60)が「初出勤」。先輩から細かくアドバイスを受けながら水温や稚魚の様子を見ていた。「責任重大で失敗は許されません」と緊張した表情。水槽をのぞくと、大きいのは8センチ(3・5センチ)近くにまで成長していた。屋外の2つの水槽では、早くもハミ出す稚魚もいて「友釣りシーズンが待ち遠しい」と伊藤さん。



屋内の中間育成池で稚魚の育成を見守る篠田副組合長

## 放流魚 4000kg 生産

今季の放流量はこの中間育成池で育てた4000kgを予定。この日、日中の水温は7度で例年に比べて低め。それでも6月下旬の解禁をにらんで、4月下旬にも放流が開始される。

## 関係機関に嘆願

最後に大きく立ち上がるのが松ヶ鼻えん堤。魚道まで遡上魚がたどり着く確率がきわめて低く、降下中の親魚が取水口に迷い込む可能性が高いと指摘されている。この春、漁協はこの魚道の改修を求めて、県丹南農林総合事務所と県に嘆願書などを提出した。やっと動き始めた天然遡上を増やす取り組み。篠田さんは「この松ヶ鼻えん堤が遡上の大きなネックでした。この魚道が改修されれば、メインとなる今庄地区が天然遡上魚であふれる日が来るはず」と期待を込めた。



## 重い十字架背負い新たな活路



日野川といえば初期の数釣り河川として往年のファンにはおなじみだった。昨夏のアユロードでもお伝えしたが、初めて琵琶湖産に別れを告げた。そこで海産系人工産一本に絞り、終盤、好釣果に沸いた。

不振だった過去数年はファンのフラストレーションも栞点に達していた。漁協には騙しい抗議の電話やネットで策振の状況が赤裸々に語られスこともあった。昨年、不振のおわびを兼ねて、年券を1万2000円から9000円に値下げ。それでも「終盤効果」があつて遊漁料売り上げはアップした。この海産系は琵琶

湖産と比べた場合、釣りになすには難しい部分もある。解禁当初の梅雨時は機能せずに8月に入ってやっと釣れ始めるパターン。「琵琶湖産を」という声は、まだ根強いという。源流部にダムがあるなど重い十字架を背負ってはいるが、「天然遡上魚」に新たな活路を求め始めた日野川。

「魚道の問題さえクリアできれば、将来、九頭竜川中部のような遡上河川として釣り人に楽しんで、もらえる日が来る」と篠田さん。

放流魚を再生産が見込める海産系に切り替えたり、網解禁を遅らせたり、長大な産卵保護エリアを新設しているのには、こんな狙いがあるからだ。

同エリアを全面禁漁にすることもできたはずだが、「下流部なので友釣り師も少なく、網などに比べると資源量に与える影響は少ない」としている。ここにも友釣り師への配慮が見える。篠田さんは「漁協にまだ少し力が残っている今がラストチャンス。本当の天然遡上河川に生まれ変わりたい」と力を込めた。